

# プラハ日本人学校の国際理解教育

前プラハ日本人学校 教頭

高知県教育委員会事務局生涯学習課 課長補佐 杉野 雅彦

**キーワード：国際交流活動，国際理解学習，英会話・チェコ語会話，遠足，修学旅行**

## 1. はじめに

ヴルタヴァ川が街の中心を流れるチェコ共和国の首都プラハは、人口約120万人、面積約500km<sup>2</sup>の都市である。旧市街広場などの街の中心は昔からの町並みが見られ、それぞれの時代の建築様式の建物が混在するプラハは、「百塔の街」「中世の宝石」などと呼ばれ、世界でもっとも美しい街のひとつに数えられている。

プラハ日本人学校は昭和47年開設の補習校を経て、昭和55年に開校した。その後、児童生徒数増加等により、何回か移転し、現在の地ジェピィへ移転したのは平成16年のことである。私が赴任した年の平成17年夏には学校の大規模改修があった。改修時には、職員室や教室内のあらゆるものを体育館へ運び校舎内を改修したので、夏休みには学校で勤務ができない状態であった。しかし、この大規模改修やその後の理科室、調理室の改修により、学習環境は見違えるほどよくなった。

本校の児童生徒数は小学部107名、中学部24名、合計131名（平成19年4月）で、年々小学部低学年の児童数が増加するにつれて、全校児童生徒数も増加していた。児童生徒の増加による学校教育活動の見直しが課題であり、教室に入ることのできる児童生徒数も考慮に入れて教室配置を考えなければならなかった。

そのような状況の中、本校は学校教育目標を「自ら学び自ら考え、幅広い視野をもち、心豊かにたくましく生きる児童・生徒の育成」とし、学校の実態にあった国際理解教育の実戦に向けて学校全体で取り組んでいった。

本校の国際理解教育は、学校教育の大きな柱の一つとして全教育活動を通じて行われている。ここでは、総合的な学習の時間、学校行事である修学旅行と遠足、国際博物館の日の取り組みについて記述する。

## 2. 総合的な学習の時間

総合的な学習の時間では、チェコに住んでいるという特性を生かし、横断的・総合的な課題などについて、自然体験や社会体験など、体験的な学習、問題解決的な学習を行うことを指導目標としている。総合的な学習の時間は、国際理解・交流、英会話、チェコ語会話で構成されている。

### (1) 国際交流活動

本校は現地校との交流を年間を通じて行っている。現地校との交流は、各学年が少人数だった数年前までは複数学年が一緒に交流を行っていたが、本校の児童生徒数の増加に伴い、1学年単位で交流ができるようになった。また、平成16年の本校移転に伴って、交流相手校として既存の交流校や近隣の現地校との交流も見直しが図られた。現地校は9月から新年度が始まるため、4月からの本校とは異なるので、お互いの交流希望時期がずれて合わなくなる。お互いの希望する交流時期を交流ディレクターが相手校と本校の学年担任の意向を聞き、調整しながら年間を通じて過度に偏らないよう振り分けてくれた。交流の形態として、基本的には本校に招待することと相手校に訪問することをセットとし実施している。

小学1年生は近隣のラウドヴァ校と「秋祭り」「たこ揚げ」「クリスマス」「日本の遊び」、小学2年生は自由時間センターと「スポーツ」「クリスマス」「折り紙」「カルネバル」、小学3年生はヴェリヒ校と「クリスマス」「日本の遊び」、小学4年生はシュコラフロウ校、ヴェリヒ校と「遊び」、社会福祉センターと「日本文化紹介」、ショコラ

J・イェジェツク校と「学校案内」、小学5年生はヴェリヒ校と「体育」、ウエーバー校と「チェコ語」「水泳」「日本文化紹介」、小学6年生はイエチナ特別支援学校、ペトシーニフ校と「スポーツ」の内容でそれぞれ交流を行った。

中学部は生徒数が少ないので、交流は2～3学年単位とし、主に「英語」交流をペジナ校、ブラネー校で行った。

## (2) 国際理解学習

### ① プラハウォークラリー

自ら判断し行動する能力を培うこと、プラハ市内の豊かな文化や歴史、自然に触れ、その素晴らしさを知ること、グループの友だちと協力したり助け合ったりすることにより人間関係を築くことを目的として、プラハウォークラリーを行っている。平成19年度は小学部低学年はペトシーン公園からプラハ城、中学年は旧市街（人物探索）、高学年はヴァーツラフ広場からルドルフィヌム、中学部は新市街から旧市街という発達段階に応じたコースを設定した。1グループは6名以内の縦割り班で、安全面を考え1グループに1人の教員がつくようにした。目的地を目指し、トラムやバス、地下鉄などの交通手段を使ったルートを自分たちで考えてグループごと出発する。教員は後ろで黙ってついて行く。わからない問題があったら、チェコの人にチェコ語や英語で質問する。それぞれが自分の得意なことを生かして、みんなが協力して問題を解いていく。毎年、児童生徒に大変好評な活動である。

### ② チェコ伝統民芸品制作

平成19年度は全校児童生徒がチェコの伝統的な練り粉細工を制作し、チェコの文化理解を深めた。生地づくり1時間、作品の制作2時間、できた生地はねかせてオーブンで焼く。事前に教員は職員研修で作り方を学習し、自分たちで作った作品を廊下に展示して、児童生徒の興味と関心につなげた。平成18年度はイースターエッグ（絵付き卵）を制作した。毎年、制作する民芸品が変わるので、児童生徒にとって楽しみの活動である。

### ③ 欧州隣人の日

欧州隣人の日の目的に賛同し、地域の住民として、自ら進んでコミュニケーションをとろうとする気持ちをもたせることを目的として、平成18年度から参加している。プラハ17区の社会健康管理センターでYOSAKOIソーランやリコーダー、合唱を発表して日本文化を伝えた。チェコの人たちの踊りも見せてもらい感動した。また、PTAも参加し、「毛筆」「けん玉」「折り紙」「こま回し」「日本の料理」などを伝え、交流を深めた。児童生徒だけでなく、保護者も加わり、それぞれが日本文化の紹介やチェコの人とふれあうよい機会であった。

## (3) 英会話・チェコ語会話

英会話を小学部1～2年生は週に1時間、小学部3年生～中学部は2時間、チェコ語会話を全学年週に1時間行っている。これらの時間には、児童生徒を習熟度別におよそ8名を規準としたグループに分け、各グループ別に教員1名が担当し学習を行っている。現地校の児童生徒との交流では、英語やチェコ語で会話をすることで交流を深めているため、これらの交流活動の内容も絡めた学習となっている。

## 3. 学校行事

### (1) 遠足

平成17年度までは小学部3年生から中学部で2泊3日の夏の自然教室をチェコ各地で行っていた。平成17年度はプラハから車で1時間30分ほど南へ行ったピーセックで行った。各学年によりフルボカー城、チェコの英雄ヤン・ジシカの像、チェコ最古の石橋、プラーヘニュー地方博物館へ行くなどの学年別活動と小川遊び、自然の中の広場遊び、自然の物で形を作ろう、絵をかこう、自然に親しもうなどの個人の希望による選択活動で構成されていた。しかし、児童生徒数増加により、活動時の安全面への対応や宿泊に伴う個別対応が困難な状況となった。

そこで、自然にふれ合い、自然のすばらしさや自然を大切にする気持ちを養うことや文化に親しむことは各学年

の遠足で、また、集団生活を通して協調性や思いやり、責任感、ルールやマナーを守ることは冬季のスキー教室で目的を達成することとし、平成18年度から1日遠足が始まった。

前年度の遠足の成果、反省を踏まえ、平成19年度には小学部1年生は近くのシャルカ公園、2年生はヴルタヴァ川・トロヤ城周辺、3年生は近くの自然豊かな谷プルコプスケーウードリー、4年生は社会の学習とも兼ねて浄水場・ジェフリカ、フリツェ付近、5年生はプラハ最古の教会ロストスキー・ヴルタヴァ川の渡し船、6年生はコニェプルスィー鍾乳洞、中学部はソルヴァヨフ採石場跡、聖ヤン展望台でそれぞれ自然や文化に触れ親しんだ。また、目的地への往復の手段は慣れ親しむためできるだけ公共交通機関を使うようにした。また、児童生徒10につき少なくとも教員は1人の割合で引率できるよう安全面にも配慮して実施した。

## (2) 修学旅行

定期的に行っていなかった修学旅行を、児童生徒数の増加により1学年で修学旅行を実施することが可能になったことや保護者の要望、自然教室の廃止などの理由により、小学部6年生と中学部2年生で位置づけて実施し始めたのは平成17年度からである。

以来小学部6年生は、平和学習の一環としてチェコのテレジンとドイツのドレスデンへ連続3年間行っている。中学部2年生は、平成17年度はオーストリアのウィーン、平成18年度はハンガリーのブダペスト、平成19年度はドイツのベルリンの日本人学校と交流を兼ねて行った。本校の歴史や学校行事を紹介したり、総合的な学習の時間に調べたり体験したチェコの文化についても発表した。相手校の生徒とスポーツをしたり、料理を作ったり、街を紹介してもらったりと、お互い積極的に交流することで、現地の学習や生徒同士の親交を深めた。

## 4. 国際博物館の日

平成18年度末にプラハにあるアジア・アフリカ博物館の方が来校し、国際博物館の日に日本文化を紹介して欲しいかとの旨の相談があった。その日は休日であったが、交流ディレクターと国際理解担当の熱意による児童生徒及び保護者への呼びかけにより、児童生徒の有志約80名が直接アジア・アフリカ博物館に集合し、発表することになった。児童生徒は合唱、リコーダー、YOSAKOIソーラン、空手を披露し、習字、折り紙、けん玉、こま回しのブースに分かれてチェコの人と交流を行った。児童生徒にとってこの日は、日頃の学習の成果や今まで培った交流活動体験を生かすためのすばらしい機会となったようである。

## 5. おわりに

国際理解教育で、主に私の心に残った教育活動について記述した。記述した活動がプラハ日本人学校の国際理解教育の全てではない。発達段階に応じて各学級ごとに取り組んでいる内容が中核になっているが、管理職として関わったいくつかの活動についてのみ取り上げた。

本校も他の日本人学校と同様で、児童生徒の転出入が頻繁にあり、3年間でクラスの児童生徒の多数が入れ替わる。また、私が赴任した3年間は、児童生徒数の増加より、今までの学習形態・学習方法では実施することが困難な教育活動を、どのように改善し計画・実施していくのか、また、新たな教育活動をどのようにして位置づけていくのかなどの課題が山積していた。諸行事の背景にある今日までの本校が歩んできた歴史と、これからの方向性を総合的に考えながら、新たな方向性を探らなければならない。また、保護者の方への説明責任も問われている。管理職として総合的な判断のもと、学校の舵取りをしていかなければならない。管理職としてある意味で腕の試される場でもあり、運営の手腕も発揮できる場でもあった。また、そういう時期に教頭として赴任できたことは自分にとって幸せであったと思う。